

- ・ 気象庁の異常気象分析検討会は9月3日（水）、臨時会を開き、多数の犠牲者が出た広島市の土砂災害をもたらすなど、西日本を中心とする8月の豪雨や日照時間が少なかった気象状況について、30年に1回以下の割合と定義する「異常気象」だったと見解をまとめた。

会長の木本昌秀・東京大気海洋研究所教授は、記者会見で「降水量や日照時間は記録的だったが、大気の流れは見たこともない状況ではなかった。こうした現象はまた起こってもおかしくはない」と説明。台風や前線による大雨が続いたことなどには、「長期的には既に地球温暖化の影響は現れており、この先ますます顕著になるだろう」と述べた。

（平成24年9月4日 岐阜新聞より）

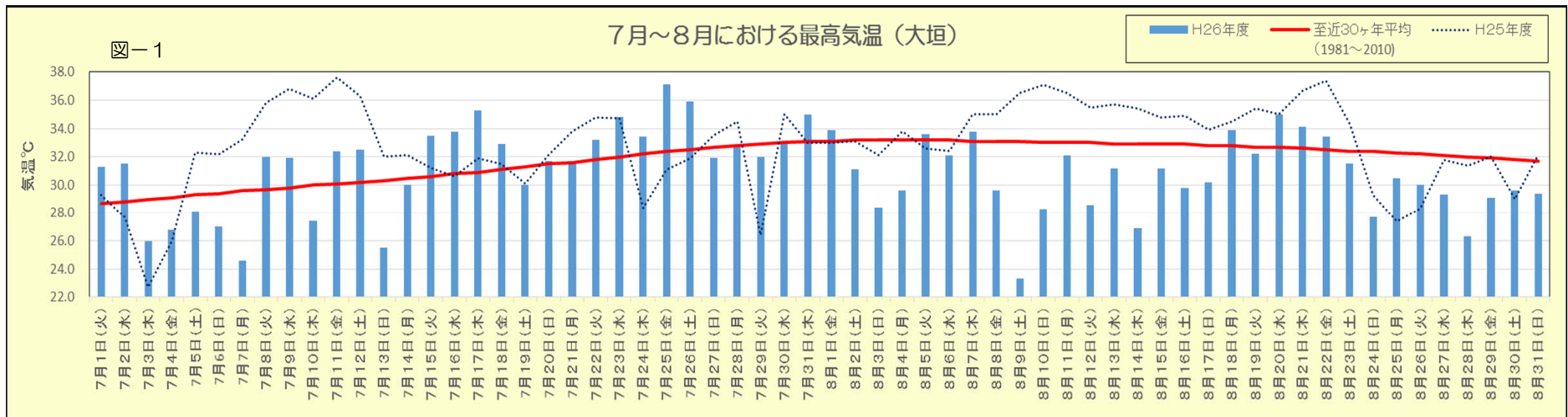


気象庁の異常気象分析検討会の分析結果について記者会見で説明する木本昌秀・東京大気海洋研究所教授＝3日午後、気象庁

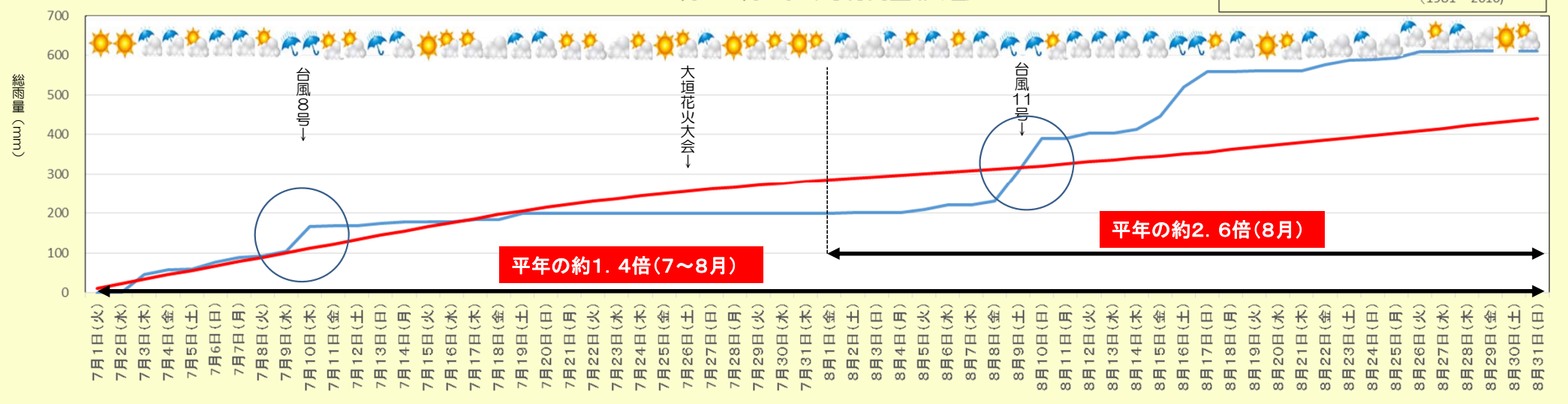
今年8月豪雨は異常気象の影響

『相次ぐ記録的大雨、大垣でも平年の2.6倍！』

- ・ 昨年の夏は、高知県四万十市でこれまでの国内最高気温を更新し41℃を記録、また気象庁の927観測点のうち143箇所でもこれまでの最高気温を更新するなど、各地で記録的な猛暑となった。当出張所管内の大垣市でも、7月から8月の2ヶ月間において最高気温35℃を超えた猛暑日が18日間発生するなど、とても暑い夏であった。
- ・ それでは、今年の夏はいったいどうだったのだろうか？ 気象庁は、この夏（6～8月）の天候予報を5月23日、「エルニーニョ現象により冷夏。梅雨入りが遅れ、降水量は6月が少な目、7月に多くなる。地域別では、北日本で多め、東日本と西日本では平年並みか少な目になる」と発表した。この長期予報が正確だったか、どうかは別として、今年の夏は、総じて「冷夏であり、週末に雨がよく降った！」と感じている人が多かったのではないだろうか。この夏（7～8月）の大垣市の2か月間の最高気温（図-1）と降水量（図-2）の状況について整理し、その特徴をまとめてみた。



7月～8月における総雨量(大垣)



出典：気象庁HP公表の観測データ（大垣）より独自に作図。なお、天気図については、「岐阜」地点の気象状況。

- この夏（7～8月）の2カ月間の最高気温は日平均約31℃であり、平年値（約32℃）と比べて約1℃低く、記録的な猛暑となった昨年（H25）の最高気温の日平均約33℃と比べて約2℃低かった。
- この夏に「猛暑日」と呼ばれる気温35℃以上に達した日は、2ヶ月間で5日のみであった。
- この夏の7月の降雨は、前半はほぼ例年並みの量で推移したが、後半は晴天が続き、雨が降らず、1カ月間の総雨量（約200mm）は、平年（約280mm）の約7割程度に止まった。
- 一方、8月は全体的に悪天候となり、週末を中心に降雨の日が多かった。特に8月中旬に発生した台風11号では、8月8日から10日にかけて2日間で約170mmの雨が集中的に降り、揖斐川では、10年ぶりに出動水位を超える高水位となった。8月の1ヶ月間の総雨量（約410mm）は、平年（約160mm）の約2.6倍であった。
- 7～8月の2カ月間の総雨量（約610mm）は、平年（約440mm）の約1.4倍であり、総じて、降水量が多く、平年よりも涼しい夏であった。

【出張所コメント】

• 今年の夏は、昨年、連日のように叫ばれた「熱帯夜」「猛暑日」と言った言葉はほとんど耳にすることはありませんでしたが、一方で、日本各地で局地的な大雨による浸水被害や土砂災害など、気象・災害に関するニュースが多く報道された年となりました。そのため、当出張所においても、連日のように防災業務に従事し、日々、変化する揖斐川や杭瀬川に関連した河川情報に注視しながら、片時も携帯電話を手放せない日々が続きました。

幸いにも当出張所管内において顕著な災害は発生しませんでした。昨年の9月4日には1時間108mmの猛烈な大雨が降り、また、今年は8月10日に揖斐川上流域で400mm以上の雨が降り、揖斐川が10年ぶりに出動水位を超えるなど、地球温暖化による異常気象とも言える災害の兆しが如実に現れてきています。予測困難な集中豪雨は今後も多発する傾向があり、災害はいつどこで発生してもおかしくありません。被害を最小限に食い止めるためにも、的確な情報把握・発信と、住民自らの判断で行動することも必要だと思えます。これから先、台風シーズンはまだ続き、防災関係者として暫くは気の休まらない日が続くこととなりますが、平常時の対応を含めて、沿川自治体と連携し、「もしもの事態」に備えていきたいと思えます。



台風11号来襲による揖斐川の出水状況。(H26.8.10)